

北国曲（きたぐにぶり）

選者卷耳とあるも月空居士沢露川編か。享保七（一七二二年）刊。

卷之六の「旧筆讚」に

名残の袖を切て心づよく見歸らず、善光寺の方に趣く。卷耳・蘭風の二子は荒井と云所迄跡をしたふ。殊更此地を北国の巡り納めとして、撰集の沙汰あれば云置く言葉の種多し。

狀に咲け越の千草の花ぞろへ 居士

戸隠し山を右に見て高山をのぼる。

突立る柱杖に湧くや秋の雲 同

關川の嶮難に足を損じて、我哀なる有様を

草臥の我を笑ふか百舌の聲 無外

註 国立国会図書館デジタルコレクション「日本俳書大

系 篇外」(DOI 10.11501/1194198) の 150 コマ
目から「北国曲」があり、185 コマ目に「戸隠」の
前書きがある。